

# 鎌倉・室町・安土桃山時代の遺跡

## ① 沖塚原東B遺跡 鎌倉時代～室町時代（13世紀後半～14世紀）

沖塚原集落の北西に位置する鎌倉時代から室町時代の遺跡です。幅約2m、深さ約1mの溝で囲まれた東西20m×南北25mの方形区画内から、鎌倉時代の掘立柱建物跡や井戸跡、柵列跡などが見つかりました。



発掘調査区全景（西から）



井戸跡

区画溝は、交点を境にして一方を浅くしたものや、幅を細めて溝同士をつないだものも多く、板などを渡した通路であったと考えられます。土師器皿や、珠洲焼・青磁・瀬戸美濃・越中瀬戸などの陶磁器、漆器椀・曲物・編物・櫛などの木製品、銅銭などが出土しており、領主などの居館的な施設を伴う集落であったと考えられます。

## ② 八塚C遺跡 室町時代（14～16世紀）

射水平野の西部に位置する室町時代の遺跡です。幅1.2～5.0m、深さ0.5～1.2mの溝で囲まれた一辺50m程度の方形区画内から、室町時代の掘立柱建物跡や井戸跡などが見つかりました。土師器皿や、珠洲焼・越前焼・青磁などの陶磁器、漆器椀・曲物・下駄などの木製品、五輪塔・石臼・石鉢などの石製品が出土しています。



発掘調査区全景（西から）



懸仏

区画溝の中からは「愛染坊常住」と墨で書かれた折敷が出土しており、寺院跡と考えられます。近くからは、銅で作られた薬師如来の懸仏も見つかっています。

遺跡の付近には、中寺家・表熊屋敷などの小字や、「昔、山伏の住む寺があったが、上杉謙信により焼失した」という伝承も残されています。

## ③ 安吉遺跡 室町時代～江戸時代（15～17世紀）

射水市のほぼ中央部に位置する室町時代を中心とする遺跡です。15～17世紀にかけての大溝や方形の区画溝、土坑・井戸跡などが見つかり、土師器皿や、珠洲焼・青磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・伊万里などの陶磁器、木札・漆器椀・曲物・下駄・堅杵などの木製品、板石塔婆・五輪塔・宝篋印塔・如来石仏・石臼・石鉢・硯・砥石などの石製品が出土しています。



発掘調査区全景（西から）



荷札

木札は、長径約3m×短径約2m、深さ約1mの土坑から出土しました。「(金?)山馬札(斗?)」の墨書と武家様の花押が記されており、15世紀後半～16世紀前半に使用された貢納物輸送に関わる荷札と考えられます。

室町時代の安吉には慶国寺という寺院があり、永享7年(1435)9月26日に舞楽曼荼羅が行われた記録があります。

#### ④ 放生津城跡【射水市指定史跡】 鎌倉～安土桃山時代(13～16世紀)

放生津城は、鎌倉・室町時代に日本海交易の拠点として栄えていた放生津に置かれた城館です。

元弘3年(1333)、鎌倉幕府滅亡に際し、幕府方の越中守護名越時あり有が一族と共に放生津城で最期を遂げたことが『太平記』記されています。

室町・戦国時代には、越中守護代神保氏の拠点となり、明応2年(1493)には、神保長誠が、京都の乱を逃れた室町幕府將軍足利義材(義植)を迎え、一時的ではあるが越中幕府と呼ばれる政権が放生津に置かれました。永正17年(1520)、越後長尾氏の侵攻により城主神保慶宗は討死します。その後、神保氏の拠点は富山城へ移り、安土桃山時代には加賀前田家の家臣が入城しますが、江戸時代初期に廃城となりました。

江戸時代の史料には、城は本丸・二ノ丸で構成され、本丸が南北約126m、東西約81m、二ノ丸は南北約50m、東西約36mの規模であったと記されています。城跡は農地として徐々に開拓が進められ、享和3年(1803)には加賀藩の蔵屋敷が設置されました。現在、城の本丸部分は、放生津小学校のグラウンド下に埋もれており、城跡を示す石碑が建てられています。

昭和63年(1988)、平成元年(1989)、平成3年(1991)に小規模な発掘調査が実施され、堀跡や土坑・溝など、本丸に関連する遺構が確認されました。また、南北朝時代から戦国時代にかけての土師器皿・国産陶器・輸入陶磁器、漆器碗などの木製品、江戸・明治時代の陶磁器など、城跡の変遷を示す遺物が出土しました。



発掘調査の様子



漆器碗出土状況



足利義材像(放生津橋)

#### ⑤ 日宮城跡【射水市指定史跡】 室町～安土桃山時代(16世紀)

日宮城は、交通の要所である旧北陸道(上使街道)沿いの丘陵に築かれた室町時代(戦国時代)の山城であり、守護代神保氏の重要拠点でした。後に、日宮城は越後の上杉氏の勢力下に置かれますが、元龜3年(1572)、一向一揆勢に包囲されて降伏します。天正13年(1583)には、富山城の佐々成政制圧のために進軍した豊臣秀吉が「日宮」で一泊しました。日宮城はその後間もなく廃城となり、江戸時代以降は里山として利用されました。

江戸時代の史料には、城は本丸・二ノ丸・三ノ丸(南ノ丸)など複



上空から見た日宮城(西から)

数の郭で構成され、本丸が南北約 13m、東西約 38m、二ノ丸は南北約 36m、東西約 28.8mの規模であったと記されています。丘陵頂部の本丸を中心に、南の薬勝寺境内や開発で消滅した東側の丘陵など、地形を利用して郭が配置されていたと考えられます。

平成 14 年（2002）の発掘調査では、大小の溝や、一辺約 2.4mの範囲に石を敷き詰めた遺構、木炭を含む穴などが見つかかり、土師器皿・越前焼・瀬戸美濃・天目茶碗など、室町時代の遺物が出土しました。後世の開発や崩落によって丘陵裾部等で破壊が進んでいるものの、本丸などの主要部は比較的旧状を留めています。

なお、丘陵の中位付近には、城跡を囲むように弥生時代の大溝が廻っており、日宮城は、弥生時代に一度造成された地形を利用した形となっています。



**発掘調査区近景（南から）**



**弥生時代の大溝（北から）**



## 鎌倉・室町・安土桃山時代の主な遺跡

### 【お問い合わせ先】

射水市教育委員会 生涯学習・スポーツ課 文化財係

TEL : 0766-51-6637 FAX : 0766-51-6663

E-mail : bunkazai@city.imizu.lg.jp

射水市埋蔵文化財センター

TEL・FAX : 0766-55-2238